

■研究調査レビュー

奄美の方言(3)

木部 暢子 (鹿児島大学法文学部)

1. 方言音声の記録と保存

奄美方言は、現代共通語が持っていない特徴を数多く持っています。発音に関していえば、「奄美ニューズレター」No.11, No.12の拙稿に書いたように、「ムィ [mĩ] (目)」や「モェー [më:] (前)」に現れる母音の [ĩ], [ë], 「キ'リ [ʔkiri] (霧)」や「ト'イツィ [ʔtitsĩ] (ひとつ)」に現れる無気喉頭化音 (息を出さずに喉頭を閉鎖して発音する音) の [ʔk], [ʔt] などがそうです。問題は、これらをどういう文字で表記するかです。言語の専門家ならば、[] の中に示したように音声記号で表記するところですが、音声記号は一般にはほとんど知られていません。そこで、以前からカタカナを使った表記法が工夫されてきました。表1に長田他 (1977), 寺師 (1985), 平山編 (1993), 本稿の表記法を挙げておきました。

文字は単なる符号ですから、かくかくの発音はしかじかの文字 (符号) で表記すると最初に取り決めておいて、あとはそれに従って音を再現していけばよいわけですが、しかし、表1によると、人によって表記法がずいぶん違ってきます。これだけ違うと、誤解が生じかねません。何とか統一できないものでしょうか。

じつは、問題はそう簡単ではありません。というのは、表記法はその人の音に関する考え方を端的に表しているからです。例えば、長田では、中舌母音の [ĩ] と [ë] の両方をエ段の仮名で表していますが、寺師や平山では、[ĩ] をイ段の仮名で表し、[ë] をエ段の仮名で表しています。このことは、長田では [ĩ] や [ë] を [e] に近い音と考えているのに対し、寺師や平山では [ĩ] は [i] に近く、[ë] は [e] に近い音と考えているということを表しています。

表1

発音	単語	長田	寺師	平山	本稿
kĩ	kĩ (毛)	けキ	キ'い	キウ	クイ
tĩ	tĩ (手)	てキ	テい	ティウ	トイ
mĩ	mĩ (目)	ムキ	ミい	ミウ	ムイ
nĩ	muni (胸)	ヌキ	ニい	ニウ	ヌイ
rĩ	tuĩ (取れ)	レキ	リい	リウ	ルイ
kë	kë:nja (腕)	けエ	ケ'え	ケウ	コエ
më	më (前)	メエ	メえ	メウ	モエ
Fë	Fë (南)	フェ	フえ	なし	フォエ
ʔki	ʔkiri (霧)	キ	キ'	キ	キ'
ki	kiku (菊)	き	キ'	キ	キ
ʔku	ʔkubi (首)	ク	ク'	ク	ク'
ku	kumi (米)	く	ク'	ク	ク
ʔti	ʔtitsĩ (一つ)	テキ	テ'い	ティウ	ト'イ
ʔta	ʔtatsĩ (二つ)	タ	タ'	タ	タ'
ta	ta:sa (高い)	た	タ	タ	タ

本稿ではこれらの音を、ウ段の仮名と「ィ」との組み合わせ、オ段の仮名と「ェ」の組み合わせで表記しています。それは、なるべく発音の実態に近い方法で表記するという考えに立っているからです。「奄美ニューズレター」No.11にも書いたように、[i] は [i] と [u] の中間的な発音、[ë] は [e] と [o] の中間的な発音です。従って、このような表記法にしたのです。

無気喉頭化音の [ʔk], [ʔt] については、人により考え方が大きく違うということはありませんが、[ʔk], [ʔt] と有気音の [k], [t] をどのように書き分けるかが人によって違っています。例えば、長田では無気喉頭化音をカタカナで表記し、有気音をひらがなで表記していますが、寺師では無気喉頭化音の場合、仮名の右肩に「」を付け、有気音の場合、「」を付けています。平山では無気喉頭化音をゴチック体で、有気音を明朝体で表しています。本稿では、無気喉頭化音の [ʔk], [ʔt] を本土にない特徴的な音と考え、これに「」を付けて表し、有気音の方は本土と同じ方式で表記しています。

以上のように、それぞれの表記法はそれぞれの音に対する考え方を色濃く反映しています。従って、どれがよいと一概には言えません。表記法を統一することが難しい所以です。しかし、奄美方言を勉強しようとする人が、いろいろな表記法にとまどうと困りますから、できれば統一する方向で検討すべきだと思います^(註1)。

もっとも、最近はCDなどの便利なメディアが手軽に使えるようになりましたから、CDで実際の音声を保存しておけば、多少表記法が異なってもかまわないかもしれません。CDはソノシートやカセットテープのような以前のメディアに比べて音の劣化が少なく、半永久的に保存できると言われています。また、薄い版にかなりの量の音声を収録することができるのも魅力です。

2. 表現法の記録

以上、もっぱら発音に関することを述べ、表現法に関することには、ほとんど触れませんでした。これは、じつは奄美方言の表現法は共通語とは枠組みが大きく違っていて、説明が大変難しいからです。例えば、「『(酒を)飲む』を方言でどう言いますか」と尋ねると、「ヌム [num] / ヌミュル [numjur] / ヌミュン [numjuN]」のように、いろいろな語形が出てきます。どのような時にどの語形を使うのか、奄美出身でない者にとっては大変難しい。また、地元の方にとっては、それぞれの語形の使い方は分かっている、意味の違いを他人に説明するのは大変難しい。しかも、地域によって出てくる語形が少しずつ違っている。それで、音の研究に比べて表現法の研究は難しいと言われてきたのです。

しかし、最近だんだんと、奄美方言の表現法の謎が解明されるようになってきました。結論を先に言うと、共通語ではまったく問題にならないような現象が、奄美方言ではひどく問題になる、それで奄美方言ではいろいろな語形が出てくるのだということです。その現象とは、証拠性 (evidentiality) と呼ばれる現象です。

具体的に話を進めましょう。松本 (1995) によると、奄美大島諸鈍方言では共通語の「飲む」に対して「①ヌム [num] / ②ヌミュル [numjur] / ③ヌミュム [numjum] / ④ヌミュス [numjus] / ⑤ヌミュン [numjuN]」の5通りがあるといっています。このうち④は「アレイ ヌミュス [ari numjus]」(彼は飲んでるじゃないか) のような反発的な意味、⑤は「ソエホエドゥ ヌミュン [söhedu numjuN]」(酒をこそ飲むのだ) のような係り結び「~du」を受けて結ぶ形、つまり「酒」を取り立てて言う時の表現です。これらを共通語に直すとすると、④は「~じゃないか」、⑤は「酒」のところを強めに発音するということになります。

問題は①と②と③です。これらはどうやっても、共通語には置き換えがきかない。というより、そもそも共通語にはこれらを表現する枠組みがないのです。従って、これらの意味用法を説明するには、語の由来や使用場面を説明するしか方法がありません。以下、これについて述べることにしましょう。

まず、①について。①はもともと連用形に由来する形です。「キューヤ アムイ フル [kju:ja amī hur]」は、強いて言えば「今日は雨降り」です。しかし、奄美方言の「アムイ フル」は共通語の「雨が降る日」とは異なり、「雨が降る」という行為を述べる表現です^(註2)。①に「テ」が付いたのが「アムイヌ フトイ [amīnu hutī] (雨が降って)」、「カタヌ ヤドイ [katanu jadi] (肩が病んで=肩が痛い)」ですが、これも共通語の「雨が降って」、「肩が病んで」とは異なり、過去・現在・未来の出来事を軽い気持ちで報告するときの言い方です。共通語の「雨が降って」、「肩が病んで」には、その後、何かが起きるという意味が含まれますが、奄美方言の「アムイヌ フトイ」、「カタヌ ヤドイ」にはそのような意味は含まれません。

次に②は、松本(1995)によると、「ふつう三人称主語と呼応する。そこで、第三者のことをたずねられたばあいのこたえとしてつかわれる」。それに対し、③は「はなしてのかんがえという面がつよくおしだされ、反省的ないろあいをおびると説明されたりする。また、はなしてが自分のことをたずねられたら、このかたちでこたえる」と説明されています。例えば、「太郎は酒を飲むか」と尋ねられたら、「太郎ヤ ソエホエ ヌミュル [taro:ja sēhē numjur]」と②で答え、「君は酒を飲むか」と尋ねられたら、「ソエホエ ヌミュム [sēhē numjum]」と③で答えるわけです。

主語の人称により動詞の活用形を変えろという習慣は、本土方言にはありません。奄美

方言でなぜ、このようになっているのかというと、それは、奄美方言の②が「居る」に由来しているからです。つまり、「太郎ヤ ソエホエ ヌミュル [taro:ja sēhē numjur]」は、「太郎が酒を飲む」状態でそこに「居る」というのが原義で、話し手が太郎の状態を「見て」表現する言い方なのです。第三者の行為や状態は「見る」ことができますが、自分の行為や状態は自分では「見る」ことができませんから、②は三人称主語と呼応し、一人称主語と呼応しにくいのです。

話し手が自分の目で見たり、自分の耳で聞いたりしたことに基づいて言語表現を行うことを、言語学では証拠性 (evidentiality) と呼んでいます。奄美方言では、証拠性の表現が非常に発達していて、自分が直接見たり聞いたりしたこと (つまり証拠があること) を②の語形で表し、直接見たり聞いたりしていないこと (つまり証拠がないこと。人から聞いたこと、頭で考えたこと、また一般論など) を③の語形で表します。

しかし、日常の言語生活を考えると、奄美方言のような状態こそが、自然な姿であるような気がします。なぜなら、証拠性のある事実と証拠性のない情報の2つを区別して相手に伝えることは、日常生活ではとても重要なことだからです。

そうすると今度は逆に、この2つを言い分けられない共通語の方が、じつは不十分なシステムしか持っていない言語だということになります。おそらく、都市では日常生活の空間がどんどん広がり、それにつれて反比例的に自分が直接確認できることの範囲が狭まっていき、最終的に自分が直接確認した事実と、自分が直接には確認していない情報の2つが区別できなくなってしまう、そのため、この2つを区別する言語形式が発達しなかったのではないかと思います^(註3)。

20~30年前までの奄美・沖縄方言の研究は、共通語の枠組みをそのまま当てはめると

いうやり方がほとんどだったため、共通語の枠組みとは異なるこのような現象が見過ごされてきました。さまざまな語形が使われるが、それぞれの違いはよく分からないというような報告が多かったように思います。しかし、近年は言語理論の発達とともに、共通語の枠組みに捕らわれない研究が多くなってきました。言うまでもなく、真に価値のある記録とは、このような理論ののっつた記録のことです。ここ10年が伝統的方言を保存・記録する最後のチャンスだと思うと、研究者は頭を柔らかくして、真の記録を目指さなければなりません。また、これからの奄美方言のためにも、現在の奄美方言をきっちりと説明しておかなければならないと、強く感じます。

注

1. ちなみに、長田須磨さんと寺師忠夫さんは奄美出身です。同じ奄美出身でも表記法が異なっているのは、あるいは出身地域の違いによるものかもしれません。一方、平山編(1993)は北海道から沖縄まで、日本語方言全体をカバーする辞典の表記法として考案されたものです。
2. 鹿児島本土方言にも似たような表現があります。例えば、「キュワ ヒガナヒシテ シゴツシ ジャシタ(今日は一日中仕事でした)」、「ジサンナ タツモントイ ジャ(お爺さんは焚き物取りだ)」のように連用形で「～をした・する」という行為の意味を表します。「ソツノン」といえば「焼酎をたくさん飲む人」という意味(太郎ワソツノン ジャ=太郎は焼酎をたくさん飲む人だ)という意味と同時に、「焼酎を飲む」という行為(キュワ ソツノン ジャ=今日は焼酎を飲むことをする)を表します。共通語の「酒呑み」が「酒をたくさん飲む人」の意味だけで、「酒を飲む」という行為を表さないと比較すると、南九州

の連用形がいかに多彩な用法を持つかが分かるでしょう。鹿児島本土では「シゴツシカタ」、「タツモンノ トイカタ」、「ソツノ ノンカタ」のように「連用形+カタ」で「～すること」の意味を表わす表現も盛んです。このような連用形の活躍状況は、南九州以南に広がる特徴ではないかと思えます。

3. 言語の問題からちょっと外れますが、他からもたらされる便利な情報と引き替えに、自らの確認行為といういかに高価なものを我々が失ったか、本気で考えなければならぬと感じます。

文献

- 長田須磨他(1977)『奄美方言分類辞典』笠間書院
- 寺師忠夫(1985)『奄美方言、その音韻と文法』根元書房
- 服部四郎(1960)「奄美大島諸鈍方言の動詞・形容詞終止形の意義素」岩波書店『言語学の方法』
- 平山輝男編(1993)『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 松本泰丈(1995)「諸鈍方言の動詞の終止形おぼえがき」『琉球の方言』18・19